

## 低成長下の精神的豊かさは 北海道の暮らし方にある、

北海道大学経済学部助教授・西部忠



経済学者の西部忠さんは、週末や休暇になると山歩きを楽しむ。愛知県出身で北海道大学経済学部にて赴任して四年たった。道内の数多くの山に登ってきた。本州との植生の違いに驚き、雄大な自然に魅せられ続けている。

「日本は低成長時代にどのように成熟していくのか。そして、日本人はどのように精神的豊かさを獲得していくべきか。大きな課題ですが、北海道の暮らし方にその手がかりがあるのではないのでしょうか。札幌市内には、割に多くのアウトドア・シヨップがあり、週末は多数の市民が近郊の野山や川で遊ぶ。そのようなライフスタイルは日本人がこれから求めるものでしょう。北海道にはすぐそばにそうした生活があります」

北海道経済の苦境は苦境として、市民の生活には豊かさがある。自然の恵みと厳しさにかこまれ、四季の移り変わりは人を感動させる。

「北海道経済の課題克服は容易ではない。そもそも、かの有名なフロンティア・スピリッツから疑ってかかるべきでしょう。クラーク博士が北大にいたのはほんの九カ月にすぎない。学生の道内大企業・官庁志向は強い。そして、中央政府の補助金に頼った北海道経済は、精神的にも中央依存であるし、市場競争も少ない。苫小牧東部開発の失敗をみてもわかるように、工場誘致とは用地提供にとどまり、

道民の才能を伸ばすプロジェクトではありません。しかし、日本経済全体にもそうした体質がある。これから、日本全体が現在の北海道のような危機を迎えるかもしれません」

西部さんは、日本経済システムの特徴である「法人資本主義」そのものが崩壊しつつあるという。やっかいなのはそうした過程のあとに、「市場主義」の社会に一変するわけではないことだ。

「単純な市場主義になるわけではない。端的に言えば、外資のシステムと従来の日本型企業システムが競争することになるだろう。自動車産業で言えば、日本型のトヨタ自動車とそれ以外の会社の競争でしょう。アメリカ型に一元化していくという人もいますが、みんなグローバル・スタンダードにいくわけではない。日本そのものが多様性を体現していくことになると思う」

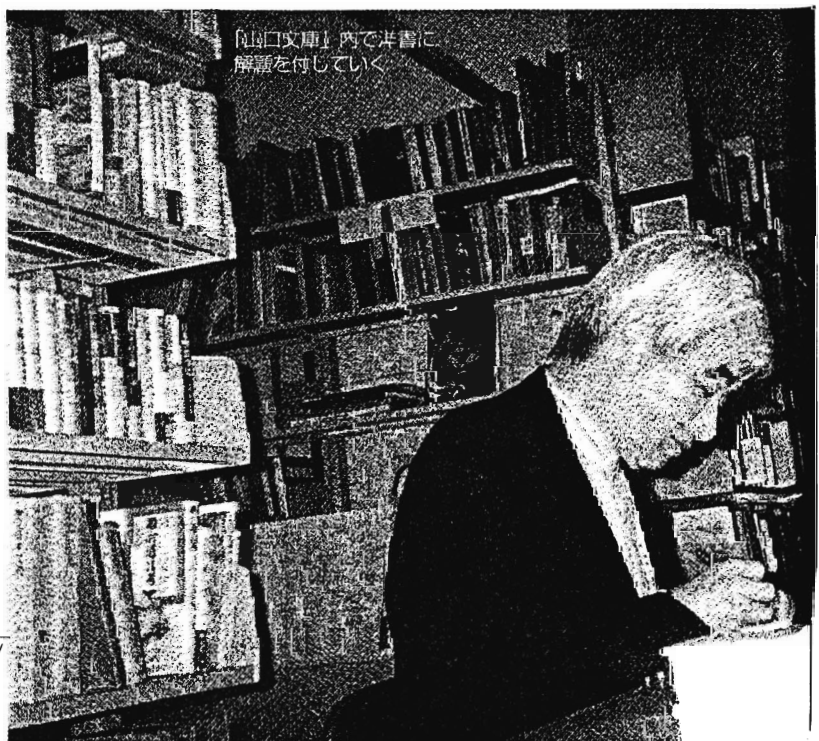
ヨーロッパに注目したいともいう。ヨーロッパの企業システムはアメリカ型一辺倒ではない。ヨーロッパを見直せという気運は高まることになる、と語る。

「低成長が変わらないとすると、日本人はこれからの暮らし方を考えたほうがよい。ここでは、冬を越した植物が五月にいつせいに咲き誇ります。その猛烈な生命力を前に、人間的豊かさとは何かを考えると、自然と共生する北海道の姿に思い当たるのです」

と、二部屋をぶち抜いた広い書庫があった。「山口文庫」である。蔵書数三万冊。昨年まで福島県の廃校に保管していた個人蔵書である。

世界各地の宗教、文化、民族、哲学、歴史など、多彩な文献が集められている。とくに『挫折』の昭和史、『敗者』の精神史（岩波書店）の執筆時に収集した近代日本の文献に圧倒的な存在感があった。現在、まだ整理中とのことだ。分類は既存の図書館分類に拠らず、本と本の関係性を重視した独特な配列だ。著作の章立てを再現したと思われるコーナーもある。

分類整理を担当している石塚さんによれば、「本と本のおき隣人関係で配列します。洋書については主題ではなく地域分類。ゆくゆくは大学図書館に寄贈する形式をとりますが、この分類は残します。いずれ、これらの文献をもとに山口昌男研究を始める人も出てくるでしょう」という。まだコンピュータにデータを打ち込み終わっていないので、検索は勘に



頼るほかはない。しかし、それはそれで非常に面白い。

「半公開。つまり来る者は拒まず。勝手にさまよってほしい。近々、インターネットでホームページも開設します。書物をめぐって双方向の情報やりとりができるといい」

三万冊の「山口文庫」が、やはりそれ自体で自己組織化を始め、新しい知的交流が生まれようとしている。ここまで攪乱すれば、従来の大学秩序との摩擦は避けられまい。しかし、山口さんはその摩擦すら楽しんでるようだ。